

知求会ニュース

2008年12月

第28号

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

伊藤文子(国際社会研究専攻・6期生)さんと千 福景(国際文化研究専攻・7期生)さんのお二方が、9月30日(火)の午前10時30分から大学本部3階第1会議室にて菅野学長から学位授与の手渡しが行われました。

◎ 他大学院・博士号取得、おめでとうございます！

平井雅世(国際社会研究専攻・4期生)さんと吉川光洋(国際社会研究専攻・4期生)さんが、2008年9月に東京農工大学連合大学院 連合農学研究科 博士課程(後期3年のみ)生物生産学専攻で以下のように学位を取得されました。

平井明世「タイ北部傾斜地における村落共同体の発展と経済変容」

博士(農学):博農甲第八二六号

吉川光洋「グリーン・ツーリズムの発展におけるIターン者の役割

—主として岩手県遠野市を対象に—

博士(農学):博農甲第八一三号

◎ 宇都宮大学大学院国際学研究科設置10周年記念式典

2008年10月29日(水)午前10時から大学会館多目的ホールで、来賓に高木英至・埼玉大学教養学部長、岡本英子・国際学部同窓会副会長、土屋伸夫・国際学研究科同窓会長らが出席し開催されました。挨拶には、菅野長右衛門 学長、高木英至 埼玉大学教養学部長、田巻松雄 多文化公共圏センター長、北島 滋 国際学研究科長の4人がなされました。

◎ 宇都宮大学大学院国際学研究科設置10周年・多文化公共圏センター設立記念

国際シンポジウム「グローバリゼーションと多文化共生の展望」が2008年10月29日(水)午前10時半から午後1時まで、第一部 基調講演 スリチャイ・ワンゲーオ(タイ・チュラロンコン大学教授)先生による「アジアとグローバリゼーション」、アンネッテ・タライベルーイリアン(ドイツ・カールスルーエ教育大学教授)先生による「ドイツにおける移民について」が講演されました。第二部 パネルディスカッションでは、午後2時から3時まで第一部の基調講演に関するコメントがあり、休憩を挟んで午後3時20分から5時まで、パネリストとして基調講演者二人に加え、岡部みどり(上智大学法学部准教授)・柄木田康之(国際学部教授)・マリー・ケオマノータム(国際学部准教授)・清水奈名子(国際学部講師)、コーディネーターに田巻松雄(多文化公共圏センター長)・スエヨシ・アナ(国際学部講師)・阪本公美子(国際学部准教授)、総合司会に高橋若菜(国際学部准教授)先生らで運営進行されました。

国際シンポジウム「グローバリゼーションと多文化共生の展望」に参加して

関根 功人

今回の国際シンポジウム「グローバリゼーションと多文化共生の展望」に参加して、改めてグローバルな今日の国際社会において、私たちはどう多文化共生をはかっていくのかを考えていくことの大切さを実感しました。今回はグローバリゼーションと人の移動に関する2本の講演を中心として開催されました。

前半のスリチャイ先生の講演「アジアとグローバリゼーション」では、アジアの中でもタイを中心として、グローバリゼーションが持つ意味を、従来の経済的側面からだけではなく、社会的側面からも捉えながらお話をいただきました。単に経済的側面よりも、社会的側面、すなわち人間の価値・人間の立場から捉える必要性が強調されていましたが、双方からグローバリゼーションを考えることに興味深く感じました。タイでは、外国人の流入が著しく、多文化社会として機能している一方で、不法就労の問題も深刻化していることが分かりました。スリチャイ先生は、これは政府だけでは対応できない問題であり、地域社会や自治体が柔軟に对应していく必要があると強調されていました。この点に関して、アクターをレベル別に考えた場合、基本的な単位となるのは、国よりもまずは一番身近な地域社会のレベルとなるので、国だけでなく地域社会も含めて、一緒に考えていく問題であると思いました。

後半のトライベル先生の講演「ドイツにおける移民：異質な人たちとの共存」では、ドイツにおける移民の問題について、ドイツがどのように対応しているのかということについてお話をいただきました。中でも、欧州はアジアと比較し、法的拘束力のあるEUの存在が大きく、先進的であると思いました。アジアにはまだそのような法的拘束力を伴う超国家的な組織が確立していないので、アジアと欧州の違いを実感しました。やはり、アジアには過去の歴史認識をめぐる根深い対立があったり、各国の足並みも揃っていない状況なので、欧州と比較しても困難な部分が多いのが実状だと思います。しかし、EUのような超国家的組織の果たす役割は大きいと思うので、アジアでも、機構のような各国のまとまりをどう形成していくのか、同じアジアとしてのつながりをどう築いていくのかを考えてく視点を持つことは大切なのではないかと思います。

タイ、ドイツに共通していたのは、移民の存在と、国家が移民とどう向き合っていくのかという問題であると考えます。グローバル化に伴い、国境が揺らぎ、人々の国境を越えた移動が身近になってきている現状を踏まえると、移民が発生し、それに伴う不就労などの問題が付随して出てきます。文化が異なる人々が共に共存するわけなので、彼らとどう向き合っていくのかということが、正に多文化共生の問題につながるのではないかと思います。日本においても、今日多くの外国人が暮らしていますが、今後の少子高齢化・労働力不足を考慮すると、外国人の労働力としての受け入れはますます進んでいくと予想されます。よって、多文化共生という問題は日本も避けて通れない問題であると思います。以

上のことから、今後はまだ具体的になっていない部分、すなわち「多文化共生」とは何なのか、目指すべきものなのは何かということ私たち一人一人が常に意識し、形にしていくなることが必要なのではないかと思います。

(2008年12月9日原稿受理)

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第5期在学学生)

◎ 9月入試合格結果

国際社会研究専攻 一般 3名・社会人 4名・外国人1名 計8名

国際文化研究専攻 一般 1名・社会人 2名・外国人0名 計3名

国際交流研究専攻 一般 1名・社会人 1名・外国人 1名・

国際交流・国際貢献活動経験者 1名 計 4名 合計 15名

◎ 平成20年度 第1回 各学部等同窓会連絡協議会報告

平成20年9月6日(土)午後1時半から、大学本部棟3階第2会議室にて、平成20年度第1回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は菅野長右エ門 学長・水本忠武 理事・海野 孝 理事・山本純雄 理事・鹿野芳郎 理事の大学側5名と事務局担当者9名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・毛塚有美 同副会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・安達久博 工学部同窓会副会長・清水由行 同理事・和賀井睦夫 農学部同窓会会長・志賀 徹 同常任理事の同窓会側10名でした。議事内容は、検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ シンポジウム 栃木県における外国人児童生徒の教育の明日を考える 2008 開催

2008年12月6日(土)に、国際学部B棟1階1121教室にて、午後1時からの第一部では、「栃木県外国人児童生徒在籍校調査報告」が開催されました。報告者には田巻松雄(国際学部教授)・遠藤 歩(国際学研究科)・大谷桂子(国際学研究科)・矢部昭仁(多文化公共圏センター研究員)の4名でした。また、コメンテーターには小原一馬(教育学部准教授)・佐藤和之(真岡市立真岡西小学校教諭)のお二方でした。午後3時20分からの第二部では、パネルディスカッション「外国人生徒の進路状況と今後の課題」が討論されました。コーディネーターには丸山剛史(教育学部准教授)先生、パネリストには風巻 浩(神奈川県立麻生高等学校教諭)・臼井智美(東京学芸大学国際教育センター准教授)・吉澤尚幸(栃木県立県央高等産業技術学校助教授)・若林秀樹(小山市立小南城南中学校教諭)・原田真理子(佐野市日本語指導員)先生らの5名でした。

* 『HANDS—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行された後のニュース発行についてお知らせします。

第2号(2007年12月17日) 「日系ペルー人移民について」スエヨシ・アナ

「異文化背景を持つ子ども」—変貌し続ける子どもの実態— 佐野市立佐野小学校 原田真理子

「ある日の面接風景より」 真岡市立真岡西小学校 佐藤和之

「小山第三中学校「日本語教室」見学」 国際学部 4年 三成清香

第3号(2008年3月7日) 「子どもの言語習得」 留学生センター 鎌田美千子

「佐野市日本語教室見学記」 国際学研究科 大谷桂子

第4号(2008年9月30日) 「外国人とのコミュニケーション」 教育学部 森田香織里

「宇都宮市「外国人児童生徒日本語指導事業」の充実について」 宇都宮市教育委員会事務局学校教育課 宇賀神俊彦

「デック学習室」—タイ人児童に対する日本語指導教室— 国際学部 4年 渡辺 恵

「大田原市立西原小学校・日本語教室を見学して」 台湾師範大学大学院生 張 庭媛

◎ 国際学研究科 公開授業開催

2008年10月4日(土)午後2時より4時まで6週連続で、国際学部 E棟 1階 1151教室にて、「アカデミズムへの誘い—先端的人文社会科学とは何か?」と題して公開授業が開催されました。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞(平成20年7月5日発行)に、中村祐司先生らが共同研究の成果を冊子化した記事が「地域・自治体・大学 3者連携のまちづくりを 宇都宮市など 共同研究、冊子に」として掲載されました。

2. 毎日新聞(平成20年7月31日発行)に、宇都宮大多文化公共圏センター「外国人との共生目指し」と題し記念シンポジウムの写真も含め、「官民学連携の拠点に期待」として掲載されました。

3. 宇都宮大学「UU now」第15号(平成19年11月20日発行)の2・3面、CAMPUSに「留学生たちの交流と安らぎの場『Tea Party』とは?」と題して若山俊介先生らの記事が掲載されました。

4. 宇都宮大学「UU now」第15号(平成19年11月20日発行)の8面、「研究 keyword」に松金公正先生による「台湾という場とともに」と題する寄稿文が掲載されました。

◎ 新刊案内

本年11月14日に、小池清治国際学部名誉教授はPHP研究所から源氏物語千年紀にふさわしい新書である「『源氏物語』と『枕草子』」が刊行されました。詳細はPHP研究所のホームページをご覧ください。アドレスは次の通りです。

<http://www.php.co.jp/bookstore/detail.php?isbn=978-4-569-69540-2>

◎ 国際学部だより

宇都宮大学「UU now」第15号(平成19年11月20日発行)の1面、OB INTERVIEW 「共に生きる」に、国際文化学科 2期生で栃木県真岡警察署巡查部長の福田美和さんが「異質の

文化を知ることの楽しさと大切さを知る」と題して取材されました。

毎日新聞(平成 20 年 4 月 17 日発行)に、「宇都宮市長が市の将来像講義」の記事の中で国際学部 4 年小島久直さんのコメントが掲載されました。

毎日新聞(平成 20 年 6 月 27 日発行)に、「アフリカ難民テーマに 宇大生が映画祭」の記事の中で国際学部 2 年高橋苗七子(ななこ)さんの企画趣旨が掲載されました。

下野新聞(平成 20 年 6 月 30 日発行)に、宇都宮大学出身 3 人組ロックバンド キャプテンストライダム (ベースの梅田啓介・国際学部出身)「NY 録音で新境地」が掲載されました。

研究室訪問 19 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 19 回目には、国際社会交流研究講座所属の重田康博先生にお願いしました。

「NGO 研究と私」

重田 康博

こんにちは、国際学部の重田です。私は、宇都宮大学国際学部に昨年(2007 年)4 月から着任しました。それまでは、北九州にある九州国際大学国際関係学部に 7 年間在籍していました。宇都宮に来てから 1 年 9 ヶ月が過ぎたところです。ですから、この大学ではまだ新米教員です。学部の授業では「国際市民社会論」、「グローバル・ガバナンス論入門」、「グローバル・ガバナンス概論」などを、大学院博士前期課程では「国際 NPO 管理論」を担当しています。教員以外の社会貢献活動として、現在国際 NGO である「オックスファム・ジャパン」の理事、「開発教育協会」の監事などを行い、地元栃木でも「JVC とちぎネットワーク」を立ち上げ、共同代表となりました。

ここで、私の過去の活動を紹介させていただきます。私は、大学の教員になるまで国際協力団体や国際協力 NGO で働いていました。1986 年に「財団法人国際協力推進協会 (APIC)」の研究員(後から主任研究員)として就職し、NGO・開発教育の研究者として途上国(以下南)の NGO、先進国(以下北)の NGO や政府による NGO 支援の調査を行いました。この NGO 研究において、南の NGO として最大規模のスリランカの「サルボダヤ・シュラマダーナ運動」、タイ、フィリピン、インドネシアの多くの NGO、大量虐殺が行われたポルポト政権後のカンボジアで活動する「日本国際ボランティアセンター (JVC)」の活動に出会い、南の現場で活動する NGO の姿に圧倒され、彼らの活動に共感を覚えました。また、NGO 先進国といわれるイギリスの「オックスファム」やカナダの NGO との出会いは、当時の私としては衝撃でした。これらの NGO は、予算規模も数十億円単位で、開発協力、開発教育、政策提言やキャンペーンを展開し、政府の政策に公然と批判をしていました。欧米の NGO の活動は、今後日本の NGO の進むべき道を示唆していました。

1994年には渡英し、プロテスタン系 NGO である「クリスチャン・エイド」のアジア太平洋チーム、アフリカチーム、政策提言チームで、アジア・アフリカへの開発協力や NGO による途上国の債務問題・貿易問題への取組みを中心に調査研究しました。1997年に帰国した後、「NGO 活動推進センター（現在の「国際協力 NGO センター」、JANIC）」で、アジアや日本の NGO の調査研究を行い、「地球市民ウィークキャンペーン」を全国的に展開しながら、「NGO・外務省定期協議会」や「NGO・JICA 協議会」など政府との対話や政府への政策提言活動の事務局を兼任していたので、体力的な限界を越えて働いていましたが、とても充実していた日々でした。

そのような NGO での働き中毒の日々の中で、「九州国際大学国際商学部」の「NGO 論」の公募を偶然紹介され、応募したところ採用されることになったのです。こうして関東からは遠い北九州において、教員としての道を歩むことになったのです。こちらの大学では、「NGO 論」の他に、「国際協力論」や「国際協力実践論」を担当していました。この時期、東京にある「オックスファム・ジャパン」の法人化に伴い代表になり、地元でも、「JVC 九州ネットワーク」の代表をしていました。

ここで紹介した 20 年間というのは、私にとってもラッキーな時代でした。というのは、1980 年から 2000 年までの間、北の NGO、南の NGO、そして日本の NGO が発展し続けて、世界や日本でも注目を浴びるようになったからです。近年では、日本の NGO 活動が新聞の 1 面やテレビのトップニュースでも取り上げられるようになりました。また、日本の政府開発援助(ODA)は、1980 年代には倍増を繰り返しました。1990 年代にはついに日本は世界最大の ODA 大国となり、2000 年まで ODA のトップ・ドナー国を続けたのです。私は、この時期に所属する団体において、南の NGO と北の NGO とのパートナーシップ、ODA による NGO 支援、NGO と ODA とのパートナーシップ、日本における開発教育や政策提言・キャンペーン活動についてそれぞれ始動や創造の時期と重なり、NGO や日本の NGO の発展を幸運にも実体験することができたのです。

今年日本で開催されたアフリカ開発会議や G8 サミットでは、日本の NGO も政策提言活動で大きな役割を果たしました。また、12 月 3 日に深刻な人道被害をもたらす「クlasta ー爆弾禁止条約」の署名式がノルウェーのオスロで開催され、日本を含めた約 90 カ国がこの禁止条約に署名しました。この条約の提案から署名まで、世界の NGO や日本の NGO が「対人地雷禁止条約（オタワ条約）」の時と同様に推進役となりました。

しかし、日本の NGO は、活動実績では欧米諸国の NGO に追いつきつつありますが、財政規模、自己資金力、スタッフの数、社会浸透度、政府との関係など課題は数多くあります。日本には、このような NGO に対する社会の「認識」や「寛容性」がもっと必要です。

今後日本で NGO の認知を広げ、市民社会を形成していくために、NGO 研究を行い、出版化していくことが求められます。欧米では、近年 NGO 研究が少しずつ進み、John Clark, Michael Edwards, David Hulme などの NGO 研究者によって多くの著作が“Earthscan Publication”などの出版社から発行されています。しかし、日本では、NGO 活動記録をま

とめた本は数多く出版されていますが、NGO 研究の本は「明石書店」、「新評論」、「コモンズ」などの出版社から出版されていますが、まだまだ少ないのが現状です。私もそれまでの NGO 研究をまとめた、初めての単著『NGO の発展の軌跡』を 2005 年に明石書店から発行しました。これからも、NGO 研究を続け、NGO の単著を発行していきたいと考えています。

私は、この宇都宮大学で少しでも NGO や NGO を含めた市民社会に理解のある学生を社会に送り出し、将来彼らに NGO や市民社会を支える担い手になってもらいたいと考えています。そして、この地元栃木や宇都宮でも、国際 NGO 「JVC とちぎネットワーク」を通じて地域貢献していきたいと考えています。

皆さまどうぞこれからよろしく願いいたします！！

(2008 年 12 月 5 日原稿受理)

博士録 04 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 4 回目には今春お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 博士後期課程を修了した、丁研究室 OG の**李 尚珍**(国際文化研究専攻・第 1 期生)さんをお願いしました。

「アンニョンハセヨ！」

李 尚珍

アンニョンハセヨ！

国際学部と国際学研究科の一期生・李尚珍です。

国際学研究科を修了したあとは、お茶の水女子大学大学院の博士後期課程に進み、今年の 3 月に人文科学博士号を戴きました。そして、4 月からは山梨英和大学の専任教員として勤めています。専門は東洋思想で、主に日韓文化交流、異文化理解について研究しています。大学でも韓国語や韓国事情、日韓文化交流史の授業を担当しており、専門を活かすことができました。

私は来日してから、日本語学校から大学、大学院へと学びの場を広げていきました。このように話すと、多くの友だちは“勉強が好きなんだ”と言いますが、好きというより“新しいことを学ぶ”ことや“考える”ことに魅力を感じています。特に日本と韓国の関係については日本にいるからこそわかることも多く、さらに自分自身が体験することによって過去とのつながりを認識するようになりました。

例えば、日本と韓国は文禄・慶長の役（豊臣秀吉の朝鮮侵略）や植民統治などの負の歴史のために地理的には近くても感情的には遠い国、つまり“近くて遠い国”といわれますが、実際私がこれまで知り合って話したりした方々はむしろ“近くて近い国”として韓国をみていました。“近くて遠い国”というイメージは、“日本人は韓国人が嫌いだろう”と思う韓国人と“韓国人は日本人が嫌いだろう”と思う日本人の先入観によって固定してしまったものではないかと、私は思いました。

そして、国際学部で比較文化論などを勉強していくうちに、日韓両国の歴史や交流などをもっと具体的に研究してみたいと思うようになり、国際学研究科では丁先生のゼミで日韓文化交流史を中心により専門的な研究を進めました。当時は日本・韓国・中国のことを専門とするゼミ生が集り、東アジアにおける日韓関係をも考えることができました。

お茶の水女子大学大学院の博士後期課程では東洋思想・倫理学のゼミに入り、日本人の韓国観について研究しました。また在学中に宇都宮大学の非常勤講師（2005年～現在）として韓国語の授業を担当し、韓国に関心を持つ学生たちとの交流を通して多くを学んだり考えたりしています。高校の講演会や大学の授業で若い世代の韓国観について聞いたり、話し合ったりすると、歴史上の出来事を認め合ったうえでさらに現在と未来への可能性を見出していきたいという結論になります。

韓国で反日・反米・反共教育を受けて育った私は、このような日本での体験によって、過去のことに拘り過ぎず、これからの交流についてもっと積極的に取り組まなければならないと強く思います。特に、私の研究テーマである「日本人の韓国観」は、山梨県出身の浅川伯教・巧兄弟のことで、彼らは植民地統治期の当時の韓国に暮らしながら、日本帝国主義に屈することなく、韓国の伝統文化を民族固有のものとして評価し、韓国の人々との対等な付き合いを実践しました。浅川兄弟の研究を通して、さらに私は、異文化理解に必要なのはほかならぬ体験・実践であることに気づきました。そして、国際学研究科には体験・実践に専念できる研究環境が整えていると思いますので、みなさんも頑張ってください。応援しています。

（国際学研究科 国際文化研究専攻 第1期修了生）

（2008年12月15日原稿受理）

知究人 09 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー（**ちきゅうびと**）を設けました。第28号の第9回目は、東京大学大学院博士課程総合文化研究科に進学されている丁研究室OGの**李賢峻**さんをお願いしました。本日現在、原稿の入稿がありませんので、次号以降に掲載を見送ります。

海外だより 02 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、海外在住者の積極的な情報提供を事務局にお寄せ下さい。今回は、ご結婚でハワイに 5 月に渡米された磯谷研究室 OG の平田希水さんをお願いしました。

「天気の話」

平田 希水

アロハ！ハワイからお便りです。
日本は、そろそろ冬本番ですね。
アメリカでは、2008 年 11 月 4 日に大統領選挙が行われました。
この報道は、日本でも過熱といわれるほどでしたから、皆さんもご存じだと思います。
アメリカでも大変な賑わいでした。
連日特別番組が報道され、アメリカ全土では投票率も今までで一番高かったという話です。
開票結果は多くの州で民主党の勝利でした。
大統領候補であったバラク・オバマ氏の出身地であるハワイ州オアフ島では、そのお祝い騒ぎを傍で感じていました。
ハワイ州においても、共和党に投票が 20%程度に対し、80%近くが民主党に投票しています。出身地の州だったせいか、民主党への投票率はハワイ州が一番高かったようです。

ハワイは、アメリカ合衆国 50 番目の最後に統合された州です。
日本人がよく行く観光地で有名です。
ハワイと言えば何を思いつくでしょう・・・観光旅行で馴染みもある方も多いですから、枚挙にいとまがありませんね。

ここでハワイ在住者として未熟者ではありますが、ガイドに載らない(?) 身近な経験でハワイを改めて紹介したいと思います。

ハワイの気候は一言で言うと、「年中 5 月」という感じです。
(体感温度による経験なので、ビーチ等屋外はコレには当てはまりません。)
心地よい風が吹いています。この風に吹かれながら、午後の昼寝は最高です。

日本はこの時期「リップクリーム」が欠かせませんよね。とはいっても、女性はお化粧品ポーチや通勤バッグ等に入れて美容対策として年中使ってますよね。
私もハワイに来る前に、お気に入りのリップクリームを大量に持ってきましたが、使うことはほとんどありません。
唇が乾燥しないのです。常になんとか潤っています。

そうなんです。

周りを海で囲まれたこの小さな島では常に「熱過ぎず、適度な温度の風」が吹いています。玄関ドアとバルコニーに通じるドアを開けると、涼しくて、穏やかな風が吹き抜けます。「扇風機要らずのクーラー要らず」な感じです。

「常夏の島ハワイ＝暑い」と思っている人は多いですが、そうでもないんですね。

アメリカ本土のカリフォルニア州やニューヨークに代表されるような大都市ではありませんが、この気候のためにこの冬の時期にはアメリカ本土から多くの人々が「避寒地」への旅行で訪れます。

こういう方々を英語で「SNOW BIRDS」と呼ぶ言葉が存在するくらいです。

湿気がない、穏やかな風が吹くハワイ、田高の今、一度遊びに来てみては？

(2008年11月21日原稿受理)

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第4期修了生)

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2008年の師走を迎えて、皆様慌しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。) 今回は、博士後期課程に在籍している藤田研究室 OB・岡本義輝さんにお願ひしました。

「学会活動のお勧めと近況報告」

岡本 義輝

博士後期課程2年の岡本 義輝です。2007年4月に博士後期課程に進学してから、約1年9ヶ月が経ちました。今回、土屋同窓会長から寄稿を求められましたので、近況をご報告します。

修士時代の3年間は授業やゼミ等で大学にも頻繁に(足繁く)通いましたが、博士に入ってからは、月1~2回位しか宇大には出掛けておりません。一番大きな変化は「学会」への加入です。

学者の先生方には当たり前のことですが小生の感じたことを述べて見ます。以前から加入している、①電気学会(IEEEJ)に加え、昨年の秋ごろから、②日本マレーシア研究会(JAMS)、③アジア経営学会(JSAAM)、④国際ビジネス研究学会(JAIBS)、⑤企業経済研究会に加入しました。①と②を除いては、経営学系の学会です。また、⑥日本経営学会(JSBA)と⑦東南アジア学会(JSSAS)は加入申請中です。これらの研究会や全国大会に出席するため、ほぼ週末は東京の研究会に出席し、また全国各地で主に土日に開催される大会に出掛けています。全国大会では、②JAMS(07年12月、08年12月)、③JSAAM(08年9月)、④JAIBS(08年10月)の計4回の発表を行いました。研究会は計5回の発表をしました。発表の主テーマは「商品開発 R&D の国際移転論」で、それぞれには、副題を変える形としました。

経営学の研究会や全国大会での発表のスタイルは、はじめに、研究の背景、から始まって、先行研究、研究の枠組み、ケーススタディー、論点のまとめ、インプリケーション、に至るまで一定のパターンがあります。また、先生方や院生の良い発表は内容に説得力があり、博論の作成に向けて大変勉強になります。小生も修士の時に学会に入れば良かったと反省しています。修士に在学中で博士後期課程に進学の意思のある人は、二つ位の学会に加入されることをお勧めします。

一般的に、全国大会で発表すると査読付の学会誌に投稿の権利が生まれます。小生は③の学会誌「アジア経営研究」に10月末に投稿をしました。編集委員の先生から11月末までには査読結果を送付するとの連絡を頂いています。査読がOKになれば博士後期課程の修了要件の一つを満たすことになります。

また11月8日(土)午後2時~3時に、宇大の国際学研究科公開授業「アカデミズムへの誘い—先端的人文社会とは何か?」に講師として話をさせて頂きました。出席者は28人でした。「定年後、60才で宇大大学院国際学研究科に入学」のタイトルで、理系技術者が「大学院国際学研究科」を選んだ理由と、入学から現在までの4年余の経験をもとに、調査・分析等の研究活動の面白さを説明しました。終了後3人の受講生から面談の申込があり、さらに具体的なアドバイスをして、修士課程への入学のお誘いをしました。

(2008年12月4日原稿受理)

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第5期修了生)

(大学院国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 1期生)

さて、知求会ニュースも、無事7年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、ありがとうございます。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

これから、年末年始にかけさまざまな情報交換がなされる時期です。昨年に引き続きぜひ、先生方、同窓生におかれましては、教え子、同級生・先輩・後輩にこの「知求会ニュースを読んでいますか?」と声をかけて下さい。メールアドレス変更に伴い、配信率が減少しています。国際学部HPにアクセスしていただければ、バックナンバーの知求会ニュースを見ることができます。[\(http://www.afis.jp/\)](http://www.afis.jp/)そして、「Yahoo!グループ」の知求会事務局へアドレスの変更連絡をお願いします。

編集後記: 限られた時間でニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか?ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。同窓会会員の皆様へのお願い:
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。chikyukai@yahoogroups.jp
